

命捧げた亡き戦友の

浮かぶ瀬もない眠れまい

男のくやしき情けなさ

君の名 幾度呼んだやら

五、今じゃ親睦 沼電会

固いきずなの戦友集い

一掬交す さかずに

あの時あの戦友あの山河

語るもなつかし過ぎし日の

心の故郷さまよわん

(二高寮歌の曲で歌います)

濠北ハルマヘラ通信隊

砲・銃爆撃に耐えて

栃木県 羽田 徳栄

私の軍隊の略歴の概要は次のとおりであります。

昭和十七年四月十日、現役兵トシ歩兵第一二九連隊入

営

同日 歩兵砲中隊編入

六月九日 東部六五部隊教育所二通信修業者トシテ

分遣ヲ命ズ

自十一月六日 至十一月一四日 秋期演習参加

昭和十八年五月六日 教育終了原隊復帰

同日 郡山着

六月二十一日 編制下令(昭和十八年軍令陸甲四五

号)

同日 歩兵第一二九連隊歩兵砲中隊ニ編入

十一月六日 輝第二一三〇部隊ニ転属ノタメ会津若

松出發

同月同日 輝第二一三〇部隊通信班ニ編入

同月九日 編制完結

同月十一日門司出發 同月十六日上海着

同月二十三日上海出發 十二月三日マニラ着

同月七日マニラ出發 同月十三日任地ハルマヘラ島

上陸(濠北派遣)

昭和十九年三月一日上等兵 同日精勤章

昭和二十年五月二十九日 軍令中八九号ニ抛り復員下令

同日編制下令 六月二十日復員（編制）完結

同日快捷第一六三三部隊転属（以上軍隊手帳より）

大正十年八月三日、現在の福島市元信夫郡杉妻村鳥谷野字館三四の農家に生まれました。家の作男をしていた人が、昭和十五年徴集で兵隊に行ったので、どうせ私も兵隊に行くのだから、それまで農業を手伝っていました。昭和十六年徴集の兵隊検査では第一乙種合格の現役ということでした。

昭和十七年四月十日、福島県郡山の東部六六部隊、歩兵第一二九連隊に入営しました。郡山で教育を受け、一期検閲の前に通信教育を受けるため新潟県高田の第六五独立歩兵团へ分遣を命ぜられました。当時歩兵团には通信隊がなかったので、高田、村松、郡山の三個連隊から選抜された者たちだったのです。

高田での通信教育について申します。我々は無線はほとんどやらないが、モールス信号は有線も無線もや

るので食事前の間、稽古にモールスをやらされて、助手が手旗でやるのを読み取った者は食事を許される。

有線は生通信だった。電話器の構造から、被覆線を伸ばして木にからげたり、鉄道線を渡ったり、各連隊ごとのコンクールのようなもので絞られました。

そのため体力が必要で、線が重いのに、「状況終わり」から電線の撤収をする。伸線するときは背負って作業し、撤収は腹へ抱え、ハンドルを締めてやる。走りながらやる。一部の者は小銃を持っていて、野外訓練が多い。一番の苦労は通信が入ったばかりの時のモールスを手旗で出し、その文を手旗で読み取ることだった。各連隊から初年兵ばかりが来て通信教育は約一カ年、その間、秋季演習には通信兵として第六五歩兵团に参加、磐梯山では分隊長が上等兵だったので一晩中食事もせず、次の朝も食事ぬきで頑張り、状況終わってから宿舎に集まったとき、我々有線班四名が連隊長からお褒めの言葉をいただいた。

両手に線を抱えて四く五キロの間、線を張ったりしながら連隊本部に付いていった。秋なのにもう雪が降

り、周囲も幾分白くなり、道路は凍りついていました。道なき道を歩いた。曉に、「状況止め」の後、三個連隊が集まったとき、先ほど申したお褒めの言葉で「少ない人員で良くやってくれた」と。撤収は他から手伝いがあり早く出来ました。

電話線を張るときは真つ暗で寒くてつらかったが、その苦労も連隊長から褒められると忘れてしまう。上司は下の者の名前を覚えていてくれた。五月、郡山の原隊へ復帰して二年兵になりました。連隊砲の実弾射撃のときも有線班は参加している。

昭和十八年十一月十一日、門司発、モルツカ諸島のハルマヘラ島へ、高雄―マニラで船が危ないので有線無線班を二分して乗船しました。マニラ発は十二月七日、明日ハルマヘラ着というとき、輸送船六隻の前方に駆逐艦、後部に駆潜艇が護衛。朝食後水柱が上がった、見ている間に貨物船がかしいだ。しかし、その後ダバオへ曳航して帰ったというが、あの時はもう駄目だと思いました。駆逐艦が爆雷を落としていった。我々の船は十二ノットだが、遅い船に合わせて航行し

て行く。

駆逐艦は速度が早い、船団は潜水艦攻撃を受けると直ちに分散していったが、また元に戻って来て船団を組みました。ハルマヘラに上陸ということになったが、栈橋は木の橋でした。沢山の貨物が積んでありました。もう一つの海軍の栈橋は水深が深いので船は横付けになつたが、陸軍のは横付けできず舢で行くのです。

出航前の話に戻るが上海で食料を積んだし、門司ではパネルを積みました。これは船が沈没したとき、兵員がそれに掴まるのである。しかし救命胴衣は出航後常に肌身離さず着けていました。船の中では潜水艦の話をしていましたから、海を見たら潜水艦のことを思っていたし、非常訓練もしていました。水筒には真水を入れ常に持っていました。

輸送船の船倉の居室は蚕棚のようで、船中立錐の余地無しでした。バシー海峡は時化で隣の船も見えぬくらい荒れていましたが、敵の潜水艦も出沒しにくかつたようで、それが幸いしてか、我が船も無事にハルマヘラへ着けたということです。

上陸すると野戦貨物廠の人たちが「司令部の要員か、偉いんだな」と言われましたが、内地から来た部隊だからそう見えたのかもしれませんが。

我々通信隊は各部隊間に線を張り交換器を置いて有線網を形成しました。無線は部隊と交信をしていました。無線部隊要員にはプロがいて、どんな故障でも直したし、外国の情報もキャッチしている。そのため情報は将校より兵隊の方が早く知ることができる。「無線報道」というのを、一枚の紙に、がり版刷りにして各隊に配りました。玉砕、内地の戦災なども知らせていました。

そのころ、既に、対岸のモロタイ島へ連合軍が上陸していました。日本軍は十五センチ榴弾砲を海岸に配置してあったが、もう使えなかった。高射砲をはじめは敵の偵察機など撃っていましたが、制空権が連合軍の手に移ったので撃てなくなったのです。

糧秣を焼かれたとき、「緊急配備で分散せよ」との命令があり、幾分分散をはじめたのですが間にあわず、ドンドン焼かれてしまいました。このようにして積ん

であつた食料や弾薬は敵の砲・爆撃によって皆やられてしまいました。自活用の農機具や脱穀機や精米機もあつたのですが、それも銃爆撃でやられました。食料も無く、焼けた米で団子を作つて焼いて食べたものです。補給は断たれており、芋の栽培をして食料としていました。朝・昼・晩、芋である。初めは芋が育たず蔓、葉柄を塩水で煮て食い、椰子の幹の芯や実のコブラを食べました。現地語で「スロロ芋」とか「カスピ」は澱粉質が多く、ふかすと餅になりました。それが主食でした。

上陸してから家に葉書を書かせたが、私の文は「螢の飛んでいるお正月」という内容のものでした。これは復員後着いたことで家の者は分かったのです。

ハルマヘラは孤立したが、西部ニューギニアから引き揚げた兵は痩せ細つて栄養失調で体は黄色くなつていました。ハルマヘラの我々も同様になってきました。Aパラチフス・マリアが多く、野戦病院はあつたのですが、Aパラの人はほとんど死んでいきました。医療品もだんだんと欠乏していったようです。

艦砲射撃はないが、インドネシアの兵補と台湾の勤労隊が飛行場設定に来ていました。飛行場の海岸の所に線を張っていて、離陸の時は帽子を振って送り出したものでした。陸軍機も海軍機の時もあった。その時は何とも言えぬ気持ちだったが、そのうち連合軍の重爆撃が始まり、そのため飛行場は使えなくなり、航空隊の飛行機は無くなってしまった。

モロタイ島に上陸した連合軍は鉄板を敷いて飛行場にしていったようだが、我々は決戦に備え軍靴は履かず、マニラ麻でわらじを作って履いて軍靴は取っておきました。結局は撃たれっぱなし、どこから来るのか分からないグラマン機が毎朝銃撃に襲われました。そのころ、蛸壺ではなく横穴を掘って防空壕としました。『臺北派遣軍』が「壕掘り派遣軍」になってしまったな」と兵隊は話し合っていました。

状況がますます悪化してきたので、奥地へ奥地へと入っていったのですが、駐屯地は水のある所でなければならぬ。双胴のロッキード機が、川に沿って上がって来る。炊事の煙が見つくと重爆撃される。その

ため山の中のジャングルの中の壕の中で生活をしていました。えらい雨期はないがスコールがありました。我が軍はスコールの水を飲み水としたりして炊飯をしていました。

敵は上陸しないが、B 24爆撃機が爆撃する。貨物集積所とか飛行場が狙われる。「来たな、落としたな」と思うと地震のように「ドドド」とくる。しかし、怖いのはグラマン機の銃爆撃だった。艦載機なので数は余り多くなかった。連合軍が上陸しているモロタイ島は我々のハルマヘラ島から見える。そこからも飛行機が来襲するが、ハルマヘラ島は大きかったためか上陸しては来なかった。しかし、爆撃のため蛸壺に入っていた兵隊が六人くらい生き埋めになりました。飛行機が去ってから掘ったが、鼻血を出して死んでいました。通信隊は戦病死者が多かったのですが、爆撃で木が倒れ下敷きとなって死んだ人もありました。

終戦は無線を傍受して知りました。そのため、ポツダム宣言の内容は知っていました。その前、飛行機から撒かれたビラには「日本軍將兵に告ぐ」とあり、そ

れには「貴方は軍閥の命に従ってこのようになっていく。故郷の父母が恋しくないか、投降すれば食料でも意の如くやります」と書いてあり、筋骨を出して瘦せた兵隊の姿の絵まで画いてありました。ピラを見たのは一度だけだったのですが。

聞いた玉音放送の「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び……」は分かりました（我々通信隊だから他と違って）。後に正式に通信隊長から降服を知らされました。その後米軍が上陸して来ました。降服白旗は、白い襷だった。蛋白質源は蚊帳で魚を取り、小銃弾で鳥を撃って取ったのですが、主食はタピオカや芋でした。タピオカには青酸が多いので摺りつぶし、水で洗い沈殿させ、団子にして食べました。ふかすと美味で腹もちがよかったです。

上陸して来た連合軍は蘭軍だったが、武装解除で、兵器弾薬は栈橋から水へ捨てさせられました。軍刀やラップを彼らは記念品として持っていた。食料は最後まで自給・自足だった。各隊が取っておいた緊急糧秣の米には穀象虫がいっぱいいたが、引き揚げる直前

久しぶりに米飯にし、「おいしい、おいしい」と食べることを今でも思い出します。

戦後は精神的に安定したのか、Aパラチフスはなくなり、マラリアは出たが、幸いに犠牲は無かった。引揚船はリバティー型の船で、昭和二十一年五月初出航し、一週間ぐらいで田辺港に着きました。内地から行く時は潜水艦攻撃で戦戦兢兢だったが、帰りは内地へ帰れると安心したためか、船酔いすらなかった。

田辺で和歌山県の山々を見て、やっと着けたと安心しました。海兵団の建物の中でDDTの殺虫薬を頭からかけられました。田辺の町では子供たちが並んで、「大変でしたでしょう。お帰りなさい」と言ってくれました。この言葉を聞いて感激しました。

夜行で故郷の福島駅へ着いたのは翌朝十時だった。

福島は戦災に遭わず安心しました。駅から三キロぐらい歩いたが、その道は草がぼうぼうと生えていて、敗戦とはこういうものかと痛切に感じました。

家で「今帰ったよ」と言うと、母は「いかったなあ」と喜ぶ。近所の人々も来てくれました。兄が市の

世話部にいる親戚に私の消息をいろいろ聞いてくれています。が、「生きているか、死んでいるかは分からない」と言われていたようだったので、私の顔を見た家族はやつと安心したのです。

近所の人とインドネシアで会ったので、その留守家族にも話し、喜んでもらえました。その後その人も帰って来ました。六月ころ、マラリアで四〇度ぐらいの熱が、二、三回くらい出て苦しんだのですが、山へ入り一冬越したら出なくなりました。

本年は戦後五十年、我々は現地のワスレ湾を記念し「ワスレ会」という戦友会を作っています。五月に四十何年ぶりで飯坂の会に参加しました。「羽田は栃木の開拓団で苦労している」ということを戦友が知っていてくれて、乾杯の音頭をさせられました。故郷を離れたが、後継者もあり、牛頭七〇頭飼って幸せに生活しています。

フリピン・ルソン決戦

虎兵団の任務は終わった

静岡県 志村 登

私が信頼し生死苦楽を共にした戦友の大半は戦死してしまいました。何とも致し方なかった。戦争を憎む心と、戦友よ安らかに御冥福をと謙虚な心で祈るのみです。

全員死を覚悟して戦った凄惨なルソンの戦場から、私は武運強く生還することができた。正に九死に一生を得たからであります。これは運不運もあるが、初年兵時代の教育により忍耐力を身につけたお陰であり、ルソンの山岳戦で人間極限の生き地獄のような戦争体験で強い精神力と体力の限界を得たからでありましょう。また、復員後、裸一貫から祖国再建のため、ただ夢中で働き続けられたのも、軍隊生活で体得した精神力に支えられた所以^{ゆえん}と信じております。